

親愛と鈍気

辻 憲男（文学部教授）

明治14年（1881）4月、友國晴子は堺の女紅場（じょこうば）に入学した。維新後の「堺県」は早く教育が開けた。まだ学校と言わず、読み書き算術と技芸を教える「工場」であった。伝記『校租友国先生』によると、24歳にして12、3歳の少女たちと机を並べた。教科書も低級のもので、好学の晴子には物足りなかったろう。三年間たゆまず勉強して、卒業後すぐに母校の教員に抜擢された。アメリカ人のレビット女史が講演に来た時、当地の女性たちが「あまりにも消極的で、卑屈な態度」であるのを、晴子はいまいまして憤慨した。「日本女子にはもっともっと教養が要る、自覚を促さなければならぬ」。21年、懇望されて新設の親和女学校の教壇に立った。

東須磨村の庄屋の次女に生まれたが、8歳で母を、11歳で父と弟をなくした。祖母と姉とで農作、養蚕、機織りに励んだ。私塾で学び、とくに漢学と裁縫に秀でた。向学の志は年齢と場所を選ばない。姉が学資を援助した。堺へは小学生の甥を伴った。常に「親愛」をもって勉強させ、その後も大阪、京都の学校に行かせた。24年、自分もまた東京に出て、国漢文と手芸を研鑽した。翌年神戸に帰り、独力で親和女学校を再建した。

学業成功の秘訣は運、根、鈍という。天の運、根気、そして鈍とは「鋭気にまかせて、うかと失敗を招く」ことの反対である。曰く、「誠や、先生は決して頭脳の鋭い秀才ではなかった。又敏腕家でもなかった」「ただ実直に底力のある、ねばり強さで、何でもやり抜く」という人であった。



堺の女紅場があった開口(あくち)神社の境内。堺市甲斐町東。
ちなみに与謝野晶子は同町内の生まれ、後に同校を卒業した。